

ロマンス語学関係文献(3)

1. 定期刊行物

1.14. ARCHIVIO GLOTTOLOGICO ITALIANO.

Casa editrice Felice Le Monnier, Firenze.
年2回発行。

1873年 G. I. Ascoli (1829 - 1907) によりとくにイタリア諸方言の科学的研究を推進するために創刊、いまやイタリアにおける最も古い伝統ある言語学誌となっている。現在 B. Terracini, G. Devoto, B. Migliorini, V. Pisani, G. Vidosi が編集、対象領域もイタリア語、ロマンス語のほか印欧比較言語学、一般言語学へと広がっている。なお欠号のリプリントもすでに完了している。

〔内容例〕：第52巻〔1957〕第1号の目次から。

B. Terracini — G. I. Ascoli Direttore dell' «Archivio»
(dal carteggio Ascoli-Salvioni).

A. G. Genre — *MALLEARE : «mangiare».

1.15. CULTURA NEOLATINA — Bollettino dell'Istituto di Filologia romanza dell'Università di Roma.

Società tipografica editrice modenese, Modena.
年3回発行。

G. Bertoni により1914年ローマ大学ロマンス語学科の紀要として創刊。現在編集は A. Monteverdi と A. Roncaglia に受継がれている。なおシリーズ «STUDI E TESTI» と «TESTI E MANUALI» は同研究所の発行によるものである。

〔内容例〕：創刊号の目次から。

G. Bertoni — L'Istituto di Filologia romanza di Roma.

G. Bottigliani — Per lo studio degli strati lessicali
nelle parlate corse.

L. Cellucci — Il latino di fronte al volgare in
Italia nei secoli XIII e XIV.

R. M. Ruggieri — Il contributo italiano allo studio
delle origini delle canzoni di gesta.

1.16. LINGUA E STILE — Quaderni dell'Istituto di Glottologia dell'Università degli Studi di Bologna.

Società editrice il Mulino, Bologna.
年3回発行。

ポローニア大学言語学科(主任教授:L. Heilmann)の紀要。創刊は1966年、ただし1965年度をもって廃刊された「QUADERNI dell'Istituto di Glottologia dell'Università degli Studi di Bologna」(G. Botti-

glioni (により1956年創刊)に代わるもの。新しい誌名は一般言語学と文体論的な性格を示すものだが、本誌の目標は“とくに構造主義的あるいは機能主義的観点からの言語学の原理と方法を追求すること”に置かれている。編集にはG. HerdanやA. Martinetなども加わっている。

〔内容例〕：創刊号の目次から。

H. Weinrich — Per una linguistica della menzogna.

G. C. Lepschy — Trasformazione e semantica.

T. De Mauro — Modelli semiologici: l'arbitrarietà semantica.

L. Rosiello — Grafematica, fonematica e critica testuale.

〔注〕 本誌1号以来この欄で紹介した文献はほとんど早稲田大学言語学教育研究所に備付けられているものである。

(早稲田大学助教授 菅田茂昭)

1.17. STUDII ȘI CERCETĂRI LINGVISTICE.

Editura Academiei Republicii Socialiste România,
București (=Bucharest)

年6回発行。

創刊は1950年で、最初の数年は年1・2回だったが、内容が充実するに伴って、1957年からは年4回、さらに1965年前後から年6回に増刷された。編集は、アカデミーに属するInstitutul de lingvistică (言語学研究所)で、1957年なかばまでEmil Petrovici, その後はAl. Rosettiが中心になって行われ、最近ではBoris Cazacuが副編集長として加わっている。ルーマニアの代表的な言語研究誌であり、収載論文は一般言語学や非ロマンス語関係のものもあるが、やはりロマンス系、とくに自国語の研究が多い。以前は論文に二ヶ国語のresuméがついていたが、最近ではすべてルーマニア語だけで統一されている。

〔内容例〕：第17巻〔1966〕第3号の目次から。

Andrei Avram. — Durata vocalelor și perceperea accentului în limba română (ルーマニア語における母音の長さアクセントの知覚).

Teofil Teaha. — Despre ʔ (velar) în graiurile românești (ルーマニア語諸方言における〔軟口蓋音〕ʔについて).

Gabriela Pană. — Propozițiile relative în gramatica transformatională (変形文法における関係節).

1.18. REVUE ROUMAINE DE LINGUISTIQUE.

Éditions de l'Académie de la République Socialiste

de Roumanie, Bucarest.

年6回発行。

創刊は1956年で、最近まで年2回の発行だったが、1964年から年6回に増刷された。編集代表も最初は老大家 Iorgu Iordan だったが、後に Al. Rosetti と交代した。雑誌の題名そのものも、1963年までは *Revue de Linguistique* であった。これは、第二次大戦前のルーマニアの代表的言語学研究誌の名でもある。SCL (前項) が国内向けとすれば、これは海外向けであろうか、収載論文が書かれている言語は、フランス語・英語・ドイツ語・ロシア語・イタリア語・スペイン語などがあり、国際色すこぶる豊かである。内容は、一般言語学関係もあるが、主としてロマンス語とくにルーマニア語が中心である。ただし、書評で扱われているものには、かなり言語理論一般にかんするものが見うけられる。

〔内容例〕：第11巻〔1966〕第3号の目次から。

Constant Maneca. — La struttura etimologica della lingua romena letteraria contemporanea dal punto di vista della frequenza dei vocaboli.

Ileana Vincenz. — Un cas de nominalisation en français.

E. Vasiliu. — Some remarks on the chronology of the change [en] > [in] in Romanian.

Maria Mărdărescu. — Observations sur la structure acoustique des voyelles [ø] et [ɛ] des dialectes daco-roumains.

1.19. REVISTA DE FILOLOGIE ROMANICĂ ȘI GERMANICĂ

Editura Academiei Republicii Socialiste România,
București

年2回発行。

創刊は1957年。Tudor Vianu が中心で編集し、Iorgu Iordan や現在の学界を代表する Emil Petrovici らの名前も、編集委員として挙げられてある。ロマンス諸語とゲルマン諸語にかんする言語学および文学研究が原則として収録され、その後に雑文や書評がつけられている。論文は大部分ルーマニア語かロシア語で書かれ、最後に二ヶ国語(たとえば、ロシア語とフランス語、ルーマニア語と英語など)の *resumé* があるので、たいへん便利である。

〔内容例〕：第7巻〔1963〕第1号の目次から。

Maria Manoliu. — Note de fonologie romanică diacronică (ロマンス語通時音韻論おぼえ書)。

Bruno Colbert. — Despre rolul accentului în morfologia limbii germane (ドイツ語形態論におけるアクセントの役割について)。

Nina Façon. — Noțiunea de "realism" în critica ita-

liana (イタリア批評における「写実主義」の観念)。

Iorgu Iordan. — *Lucrări recente de lingvistică romanică generală* (一般ロマンス語言語学の最近の研究業績)。

1.20. CERCETĂRI DE LINGVISTICĂ.

Editura Academiei Republicii Socialiste România,
București
年2回発行。

創刊は1956年で、第1巻は4分冊、以下しばらく1冊にまとめ、1961年から年2回になった。編集は、アカデミー所属のCluj市言語学研究所で、Emil PetroviciとD. Macreaが中心になって行われている。Cluj市はルーマニアの北西部にあり、古くからBucharest市とともに学問・文化の中心地であった。論文はすべてルーマニア語で書かれ、研究テーマもほとんどがルーマニア語についてだが、各号ともだいたい「音声学と音韻論」「文法と語い」「地名研究」「文学語」「書評」などの項目に分けられ、各2～3編の寄稿がなされている。

〔内容例〕：第8巻〔1963〕第1号の目次から。

D. Macrea. — *Contribuția publicațiilor periodice la dezvoltarea lingvisticii românești* (ルーマニア言語学に対する定期刊行物の貢献)。

E. Petrovici. — *Analiză fonologică și morfonologică. În legătură cu statutul fonologic al africatelor dentale aromâne* (音韻論的および形態音韻論的分析。アルーマニア方言における歯破擦音の音韻論上の資格に関連して)。

E. Tanase. — *Locul adjectivului demonstrativ în limba română* (ルーマニア語における指示形容詞の位置)。

1.21. LIMBA ROMÂNĂ.

Editura Academiei Republicii Socialiste România,
București
年6回発行。

創刊は1952年。編集はIorgu IordanとIon Coteanuがあたり、ルーマニア東部の伝統ある文化都市Iași (Yassy)からも委員が参加している。論文はすべてルーマニア語で書かれ、研究題目もほとんどが自国語の構造や歴史についてだが、各号とも「一般言語学」「文法と語い」「文献学」「おぼえ書と注釈」「書評と書誌」などの項や、時には「語史」「地名研究」「方言研究」「文学語」「追悼文」などの項に分けられ、各2～3編の寄稿がなされている。

〔内容例〕：第16巻〔1967〕第5号の目次から。

F. Király. — *Etimologia și împrumuturile. Despre unele împrumuturi maghiare* (語原と借用。いく

